

＜書 評＞

渡辺正毅（帝京大学客員教授） 編集
広畑和志（神戸大学教授）

膝関節の外科 第2版

小林 晶（福岡整形外科病院院長）

本書の初版が世に出たのは1977年である。これ以後の膝関節外科の進歩には今回の序文にある通り目ざましいものがあって、この領域を特に専門に取り組んでいる者にとっても目くるめく思いがする。

これに応ずるように第2版が出版された。本書は第1章膝関節総論、第2章膝関節の疾患、第3章膝関節手術法、第4章リハビリテーションと膝関節の離断・義足の4つに大別されている。この中で第1章の総論ではこれまでの成書に記載が少なかった解剖、生理、生体力学、検査法が詳述されて、これから膝関節だけではなく広く関節外科の研究、診療を始めようとする人にとっては、特に有用である。もちろん認定医になられた人々にとっても基礎的事項を復習するのに必要かつ充分の知識と理解が得られると思われる。とかく外国の文献のみに基づいた記述が多くなる、基礎的な知識は漸くわが国からも独自の情報が得られるようになった感が深い。シンチグラム、CTスキャンなどが新たに加わっている

のも便利である。

第2章では日常頻度の高い疾患はもちろん、ほぼ全般にわたって網羅されている。スポーツ外傷の項が新しく設けられているのも、時宜を得たものといえる。この章で現時点でも記述困難なのは、膝蓋骨軟化症と靱帯損傷である。本書ではいずれも簡潔にまとめているが、さらに症例の集積によって新しい概念が出現し、分類整理することが必要であろう。そして本書が斯界をリードしてゆくためには現在の膨大な情報を的確に把握して読者に提供してレベルを示す必要がある。これがないと、おざなりの疾患羅列になって、読者の求めには答え難いであろう。

第3章には新しく鏡視下手術が加わって一層充実している。前章と同様に初心者が大方の傾向をつかむのには問題はないし、手頃である。とくに人工膝関節の項は極めて要領よく記述されて参考になると思った。やはり靱帯損傷の治療は適応と相俟って、もう少し図を豊富に詳述されてもよかったと思う。ページ数の関

係もあったと想像するが、次版に期待したい。

第4章は他書にみられない素晴らしい記述であり、これまでとかく等閑視されていた問題だけに実戦的に役立つ事項が多い。外科の治療ばかりに目を向けると、とかくおろそかになるのは基礎として念頭におかねばならないリハビリテーションの概念と装具の問題であろう。この章ではリハビリテーションと評価、筋力増強プログラム、可動域改善とストレッチング、装具、関節離断と義足に分れていて、このあたりから読み始めることも大切なことだと痛感させられた。

文献なども未だ集大成がやや不足と思われる部分があり、総論的に重要なものや特殊なもので必読のものは是非次版に加えていただきたい。

以上本書を概観したが、これまでに果たした役割を考え、この版を新しくした企画は全く世の中に迎えられられると思われる。膝関節外科を学ぼうとする人、ある程度の修練の後に反省と将来の展望と進歩を求める人には、本書を座右に置かれることをおすすめする次第である。

（B 5，頁 504，図 255，写真 370，
原色図 34，1985，¥ 20,000
〒400，医学書院 刊）